

(2) 2♂., 神崎郡神崎町福山、16-VI-1987、安保孝子採集

ナラガシワの根際の落葉を掘ると発見できたという。(正午頃)この地のナラガシワ林にはコクワガタ、ミヤマクワガタが多産する。

ヨツボシナガツツハムシ 六甲山系逢山峡に産す

(兵庫県甲虫相資料 . 208)

高橋寿郎

ヨツボシナガツツハムシ *Clytra arida* Weise はやや中型のハムシであり(体長 8.0-11 ミリ)異々円筒状で強い光沢のある黒色を主体に上翅は赤褐色で肩部と中央部との辺に1個宛左右合計4個の黒紋を有するハムシで見方にもよるが大変印象的なハムシであり兵庫県下ではなかなか得られなくなんとか産地を探したいものだと思っていたが最近になって結構たくさんいる種ということがわかってきたのでそれ等を中心に若干の報告をしてみたいと思う。

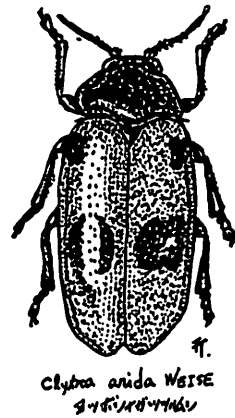
まずこのハムシを日本で始めて紹介されたのは J.S. Baly 氏でその論文 "Catalogue of the Phytophagous Coleoptera of Japan, with description of the species new to science" (Trans. Ent. Soc. London, 1873-Part. I) の中で (p. 80), *Clythra laeviuscula* Ratzeburg なる学名で Hab., -Hiogo.oak (カシワ) により1頭を得たと云う記録である。即ち神戸産標本で始めて日本から本種が報告されたのである。氏は同時に次の様に追記しておられる

"A. Adams 氏が Chusan で採集したものと同じく A. Adams 氏採集

Vladimir Bay, Mantchuria での採集品も所有する。この種はアジアの北部に分布し、ヨーロッパにも広く分布している"とされている。

1879年には L.v. Heyden 氏が Prof. Dr. Rein の日本での 1874-1875年の採集旅行で得た甲虫をまとめられた論文で (Deut. Ent. Zeit. X X III, 1879, Heft. II, p. 361) 京都から3頭得たと記録された。

1887年の Schönfeldt, H. V. 氏による "Catalog der Coleopteren von Japan mit Anzabe



Beschreibungen und der sichr bekannten Fundorte" なる目録の中では(Jahrb.d.nass.Ver.f.Naturkunde 40:175), *Clytra laeviuscula* Ratzeb. と風名が変わっていて産地はHiogo のみ掲げられている。

1907年には松村松年博士の日本千虫図解第4巻(pl.59,f.14,48)に始めて図説され戦前のはほとんど図鑑類は図説もされているし戦後の図鑑類にも一々書名は掲げないがほとんど図説されていると云うことは可成り普通に目につく種と云うか可成り印象的な種であると云うことは云えそうである。

ごく最近まで *Clytra laeviuscula* Ratzeburg と扱われていた関係で分布はヨーロッパ、シベリア、北支、満州、朝鮮、日本(本州、四国、九州)とされていた。

ところが1956年の中條道夫博士の“図説食葉はむし類”の中で(p.26)、日本産のものはヨーロッパ産のものに比較して上翅の黒色紋ことに中央部のそれが比較にならぬ位大きく且つそれに退化縮小する様な傾向も認められないとして日本産のものはヨーロッパ産の種の一つの地方亜種を構成するものではないだろうかと云うことをのべておられる。

C. laeviuscula はヨーロッパに分布している普通種なのかもしれない。筆者の手許にも次の様な図説がある。1912, E. Reitter, Fauna Germanica IV (Taf. 142, f. 13). 1934, G. Portevin, *Côleoptères de France* Tome III (pl. X V, f. 180, 198). 1947, *Côleoptères de France* Tome III (pl. V, f. 85, p. 31). 1971, *Coleopteres de France* Tome II (pl. V, f. 85, p. 161). ただ図説だけでは日本産との区別はそれ程はっきりとわからない。やはりヨーロッパ産の標本を数多く見なければいけない様に思われる(確かに日本産のもの中央部の黒色紋は大きく図説されている。ヨーロッパのものより大きい印象は受ける)。

この点から木元新作博士は1983年アムール原産でシベリア、蒙古、北支那、朝鮮、日本(本州、四国、九州)に分布しヨーロッパにはいない *Clytra arida* Weise なる学名を日本産にあてるべきだと発表しておられる(Ent. Rev. Japan, vol. 38, No. 1, p. 18)。したがって本種は日本周辺にいる種と云うことになる(Kim C. W. の *Distribution Atlas of Insects of Korea Series 2, Coleoptera*, pl. xv, CH 07, p. 141, 1978)によると主として南鮮であるが結構広く分布していて割合普通に見られる種のようなのである(1980年の *Economic Insect Fauna of China Fasc. 18. Coleoptera: Chrysomelidae* (2)には p. 215, pl. X V, f. 147 に *C. laeviuscula* がカラーで図説されていて中国内に広く分布している様である。分布は朝鮮、日本、シベリア、ヨーロッパをあげている。中国大陸にはこの *Clytra* 属のものは本種をふくんで3種いることになっている)。

日本での分布も割合広く(本州、四国、九州)それ程珍しい種ではないと考えられるが案外と記録は少ない様に思われた(一々地方の記録を拾って見なかったが身近にあるものを散見した範囲では)。だが兵庫県に関しては日本で始めて記録された地でありながその記録が意外と少ないのに驚かされたこの点についてはかつて筆者も報告したことがある(きべりはむし Vol. 9, No. 1, p. 6-7, 1981)。

さて兵庫県で本種の記録を調べて見るとBaly氏のHiogo産は1個体である。場所はわからない勿論今より自然状態の良い時期の採集である。Schonfeldt氏の記録はBaly氏の記録を収録しただけである。

関 公一氏の神戸市御影町附近と云うのがある(1933)。この記録には六甲山、摩耶山をふくむ地域のものであるとその第1報の冒頭にのべておられる。従って恐らく六甲山か摩耶山での産地ではないかと思われるが何とも言えない(学名の命名者名はBalyではない)。

仲田元亮氏の記録しておられる猪名川町杉生新田は籠坊温泉の手前で地図で見ると標高400m位のところである。

山本義丸氏は氷上郡粟鹿峯頂上附近に産するも稀としておられる(1953,1958)。粟鹿峯は標高962mもある山である。

高橋 匡氏は養父郡氷の山を記録しておられる(1975)。この山は良く知られた山であるからとやかく云う地ではない(氷の山標高1510m)。ただ高橋氏が同時に記録されている豊岡市大磯と云うのは豊岡市内円山川沿いの地点で標高の低い所であり県では北部に当たるので気温等はかなり低いとは考えられるが採集地点としては注目すべき地点である。

美方郡扇の山の記録もある(辻, 1963., 辻, 岸田, 1972)。この山も標高1310mの山であるからその麓近くとしても標高はそこそこある地点であろう。

丹波、但馬地方を除いては六甲山系が産地として知られているだけになる。

筆者が六甲山で採集したのは1950年7月3日1♀を紅葉谷で採集したもので石田裕氏が採集されたのも同じ紅葉谷で御一緒して採集されたのを確認した(2exs., 15-VII-1956)。紅葉谷であるから標高400~600mのあたりであると思われる。

小林桂助氏の御所有の標本を見せていただいた時六甲山で採集された数匹の標本があった。ただ残念なことにデータを寫さなかったことと採集場所をお聞きしなかった。

岩田久二雄博士は唐櫃の標高400mの所で♂♀を採集したとかいておられるし(15-VII-1976)、岩田博士の友人の大の虫ずきの水野 修君が唐櫃で採集してくれたものが博士としては三回目の出会いであって本種は山地生のものか仲々出会わない虫として紹介しておられる。博士のように野外観察を充分しておられる方でも余りお目にかからない数少ないハムシと云うことが出来そうである(昆虫を見つめて五十年、II., p.51-55, 1978)。

こうした状況から六甲山の北側部分には本種がいることはわかっているけれども仲々それを自分の手で採集となるといろいろの制約があって実現しなかった。1982年芦谷溪谷が話題になり何度か訪れた。1982年6月11日溪谷の入口、岩谷峠を越えた地点標高424mの所の道路ぞいのハギで同行の蜂谷幸雄氏が1♂採集された(標本筆者保管)更に六甲山の北側斜面逢山峡(岩田博士の唐櫃とは神戸電鉄をはさ

んで北と南になる)に蜂谷氏と出掛けてやはり標高400m位の所のハギから4♂1♀を採集することが出来た(1982年7月2日)。この逢山峽はその後調べに行く機会が無かったが1986年7月1日単独で出掛けて詳しく探して見たがとうとう見つけることが出来なかった。どうも不思議だと1987年6月27日に再度出掛けたがその日も全く見る事が出来なかった。ところが7月7日1982年に採集したと同じ場所で3♂3♀が採集出来た。やはりいるのである。それから7月11日再び訪れた。同日は天気もパットせず風がきつく1♂しか採集出来なかった。それからは連日雨という状況で調べに行くことが出来なかった。久方振りに7月28日訪れて見た。ハギツツハムシ、ハギルリオトシブミは多いのに(この兩種共7日の時点でも多かった)ヨツボシナガツツハムシは遂に1頭もお目にかかれなかった。

芦谷溪谷入口は6月11日に採集出来ていて一寸早い逢山峽では7月上旬にお目にかかれることが一番多い様である。ただし岩田博士の唐櫃で採集されたものは7月30日も産卵し♂も♀の産卵期間中ずっとその背面にとりついて授精姿勢をととのえていたとあるから恐らく野外でも8月初めでも見られるのではないかと考えられる(豊岡市大磯の採集は8月6日となっている)。

いずれにしてもこのハムシ兵庫県下では標高400m以上の所で見られたのがほとんどである(豊岡市のみ例外)。集合して生活をするのではなく単独的な生活をしているのか(産卵状況はどうも卵を一つずつ卵鞘に包んで産み落している様である)一度に多くを採集することがむづかしい種の様である。

現在の県下の分布は案外と県中央部とか西部地域で知られていない。多分もっと分布は広い様に思うのだが仲々お目にかかれぬ個体数の少ない種と言えよう。

食草に就いては中條・木元両博士はカンバの類、ブナの類、ヤナギの類とされており(1961)、木元博士はカンバ、ブナ、ヤナギの類(1984)を掲げておられる。

竹中英雄氏はハギ類、カンバ類、ヤナギ類を食草に掲げられている(1975,1985)。

岩田博士はハギから採集したとはっきり記録しておられる。筆者の採集も全部ハギからである。少なくとも兵庫県下ではハギを食草としていてと考えて良いのではないだろうか!前にも記したが逢山峽あたりハギは道路ぞいに續いてたくさんあるが標高の低い所ではほとんど見られず標高400m位の所に見られると云うことは何か標高との関連がある様な気がしないでもない(気温との関係もあるかも?)

産卵の状況、卵と卵鞘の図入り解説は岩田博士のものがある。だが幼虫、蛹に就いての生態は現在全く知られていない様である。(最近今森光彦氏はヨツボシナガツツハムシの産卵状況を美しいカラーで紹介され卵は糞で保護されるツツハムシ類の習性を示されている。アニマ No.184,p.31,1988)。この属のヨーロッパに産する3種と近縁のツツハムシ属*Cryptocephalus*の種に就いて主として卵に関してファーブルは詳しく解説をしている(岩波文庫、ファーブル昆虫記 第14分冊、p.51-74,1978年版)。しかしながら全体の生活史と云うのはわかっていない(竹中氏によると外国では幼虫がアリの

巢で寄生生活することが知られているとかいておられる。1975,1985)。

飼育もそれ程たやすくはないのかも知れない。今後の観察結果によることとすると同時に県下での分布特に空白地帯をもっと探して見たものだと思っている。

(DEC.1987)

県関係文献紹介

- Kishii, T., 1987. A Taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the subfamilies, tribes and genera.

Biol. Lab. Heian High Sch., Kyoto (priv. pub.): 1-262, 1 tab. 12 pls.

本会会員岸井 尚氏はこの論文により京都府立大学より農学博士の学位を授与されました。長年コメツキムシの研究一筋に励めた結果当然と云えば当然ですが日頃の地味な研鑽の賜物と心より喜び申しあげます。おめでとうございます。

尚この論文中兵庫、淡路島と特に産地が示されている種(岸井博士以外の原記載産地で兵庫と云うのは除く)が10種あり兵庫県産甲虫類に関する文献としても重要です。

- 兵庫県自然保護協会宝塚支部機関紙

1987第2号(9p.).

本会会員新家 勝氏編集によるものである。奥谷博士、東先生、本会会員小田中 健氏等がそれぞれ健筆をふるっておられる。一般を対象にされたものであるが仲々楽しい内容になっている。

今後の発展を大いに期待したい。

(1987年11月刊)。

- 藤平 明、1987. 南淡の蛾 59p. (自刊)。

1979年に藤平 明氏は“南淡の蛾”と題し三原郡南淡町阿万上町での蛾相調査結果の42科 657種の蛾の目録を自刊された。その後も同地域の蛾の調査を続けておられ1987年11月再び30年間のまとめとして同じ題名の“南淡の蛾”を自刊された。今回はワープロできれいに印刷されていて44科810種がリストされている。この地域のファウナを知る上の大変貴重な文献となっている。ただ惜しむらくはコメントをもう少しつけて頂きたかった。この様な洗味な調査の結果を発表にな